

地方自治ここにあり 首長インタビュー

一人ひとりに居場所と出番があるまちへ —自分事意識がまちをつくる—



中阪雅則 かつらぎ町長

かつらぎ町長 中阪雅則 さん

昨年9月の町長選挙で、現職との一騎打ちを制し、かつらぎ町長に選ばれて一年。中阪雅則町長は、このまちに決定的に欠けていたのは「情報発信力」だと言います。首長インタビュー今回は、ふるさと再生に取り組む中阪町長にお聞きします。インタビューは、当研究所の鈴木裕範常務理事です。

有権者に 新しいリーダー待望論

鈴木：海南市の幹部職員からかつらぎ町長に、現職を破つての転身でした。町長就任は、それだけ中阪町長への大きな期待があった、表れだと思えます。裏返せば、これまでの町政に有権者が満足していなかったことになりませう。

町長：一般的に当選の確率は圧倒的に現職有利ななか

で、今回のような結果が出たということは、不平不満というよりは閉塞感があったというよりは閉塞感があったのは確かだと思います。選挙で回ったときに、たくさんの方が口にされていたのは、若い人がどんどん出ていくと、この町にとどまらねえなと、そういう状況の中で、この町の将来が不安という声はたくさん聞きました。そういう状況で、新しい流れ、新しいリーダーを求める感があったと思えます。

私はこの町に住みながらほかの町で働いていたので、外から見るかつらぎ町という視点を持てたことが、立候補の一つのきっかけになりました。

鈴木：内と外、両方からの目で、ふるさとを見つめていたと。

町長：そうです。案外、自

分の住んでる町をよく分かっている住人も行政マンも多いと思うんです。子どもたちの保護者組織である育成会の会長をさせていただいた時に、町が主催する会議のメンバーに入れていただきましたが、そんな中で、このままだとちよつと厳しいなあという思いと、もつと資源を活用すれば、可能性やポテンシャルが高い町だと思つたわけです。財政状況を見れば、かなり逼迫した状況にあり、農業政策に注力して、ほかの産業とのバランスが悪かったり、若者が住みたくなくなるような政策が少なかつたりというところで、可能性と課題がはつきりと分かるようになり、決断をしたというか、いわゆる自分事になつてきたということなんです。

町の組織改革断行 プロジェクトチーム設置

鈴木：さて、町長は公約に人口2万人計画を掲げてらっしゃいますが、今月(8月)、総務省が発表した人

目次

地方自治ここにあり 首長インタビュー 一人ひとりに居場所と出番があるまちへ —自分事意識がまちをつくる— かつらぎ町長 中阪 雅則さん……	1
持続可能な和歌山の農林漁業をめざして FFPW代表幹事、FFPJ常務理事 紀ノ川農業協同組合 組合長 宇田 篤弘……	6
シリーズ「若者から見た現代社会」⑦ 誰がためにマナーはある 和歌山大学 平見 真由……	8

わかやま住民と自治

発行／和歌山県地域・自治体問題研究所
和歌山市太田2丁目14-9 太田ビル203号
TEL・FAX 073-488-3127
jichiken@crux.ocn.ne.jp 2020年10月号



かつらぎ町役場

口統計では、人口減少が過去最大になって、東京一極集中が更に進んでいるというところが、明らかにになりました。先に、増田元総務大臣を座長とする日本創生会議がまとめたレポートでは、かつらぎ町の2040年の人口は9695人で、消滅する可能性が和歌山県の自治体の中で10番目だという大変厳しいデータが出ていました。その中で、2万人計画を具体的にどう実現していくかとお考えになっておられますか。

町長：人口2万人計画というのは、具体的な計画をもつて掲げているわけではありません。日本全国の人口が減少しているということは、否めない事実でございます。そこに加えて東京一極集中というのも当然、結果として出ています。ただ、明るい話で言うと、和歌山県は割と30代女性が増加しているんですね。2020年の時点で既に予想よりも約1万人近く多い状況でクリアしましたので、手立てを講じていけば変わっていくと考えています。

人口2万人計画を実現するための役場内のプロジェクトというか、幹部職員で定期的に協議をしています。今日もその会議をやったんです、町の基本的な考え方を示していく必要がある。例えば子育て支援と教育を中心として、住宅を支援していくような政策です。転入されてくる方にアンケートをとると、教育と働く場所というふうに答える方が多い。私も最初、企業の誘致と思っていましたが、実態を調べてみると、企業誘致よりもアクセスの

良さ（大阪の外環状線まで僅か15分）を活用して、こちに住んでもらって、働くのは大阪でということを考えています。住む場所を提供するためには、土地の確保が必要です。土地の地権者やいろんな住民の協力を得ないとできません。私の人口2万人計画というのは、住民と行政は英知を集結して成し得ていくものであるということを常々、幹部職員にも言っておりますし、住民にもそのようにお願いをしております。

若い世代の仕事と子育て西部公園は母子の場に
鈴木：働く場ですが、IT社会を生かした取り組みがポイントではないかと思えます。地域産業の再生にどう取り組みますか。
町長：かつらぎ町は、中企業と位置付けられるような企業がいくつかありまして、お隣の橋本市に比べますと、企業数では3分の1しかありませんが、生産高というと勝っているんです。事業訪問して、お話を聞くと大卒ではなく、高卒の若い子が欲しいという企業が圧倒的に多くて、例えば、ある企業は、和歌山県下で一番高卒を多く採用しているようなんですが、私どもの町の高校からの就職は少ない

良さ（大阪の外環状線まで僅か15分）を活用して、こちに住んでもらって、働くのは大阪でということを考えています。住む場所を提供するためには、土地の確保が必要です。土地の地権者やいろんな住民の協力を得ないとできません。私の人口2万人計画というのは、住民と行政は英知を集結して成し得ていくものであるということを常々、幹部職員にも言っておりますし、住民にもそのようにお願いをしております。

鈴木：プロジェクトチームというのは、幹部職員を中心とした組織なんですか。
町長：そうです。この4月から人事、組織の仕組みを変更しまして、課長の上から参事という職を置きました。総務と福祉部門を統括する参事1名と、産業と経済と建設関係を統括する参事1名、教育次長、そして全部を統括する総括参事の4人置いたんです。そこに教育長と僕を入れた6人は、この町の経営者ということで、毎週月曜日に経営者会議を

やっています。今日はたまたまそのプロジェクトの話を中心にしました。
経営者会議は、会社でいう取締役会のようなイメージで、業務をやる担当課長は現場で頑張ると、その上には経営者がいる。そして経営者は、課長と連絡を取ったり、課長を指導したり、また課長から意見を聞いたりしながら、経営者会議で根底の部分を練っていく。それを政策推進会議に下ろして、そこでまた議論して意見を集約して、反映していくという、2段階の会議を経ながら進めています。

鈴木：それをどうまとめいくか、町長の力量が問われることになりませんか。
町長：そうですね。
鈴木：参事、いわゆる取締役クラスの皆さんの男性と女性の割合は。
町長：全員男性です。これはちょっと残念だなと思っています。
鈴木：将来的な課題かもしれませんね。
町長：将来的というより、本当の課題は、女性の課長



母と子が育つ場所へ 西部公園

ようなので、御坊や田辺からこちらへ働きに来ている方がたくさんいるようです。この町の子どもたちがこの町に帰ってきて働ける環境をつくりたい。

大卒だとなかなか採ってもらえないということであれば、大卒を採用してくれる企業をどのようにして誘致するかという問題と、元の企業へ就職したいと思うような子どもたちをつくるために、ふるさと教育をきちんとやっていかないとけない。

ITということが出てきましたけども、テレワーク

とか、リモートとかいろいろ言いますけども、東京に本社があっても、働く場所は和歌山でというようなことが可能になってくるというのであれば、田舎で暮らしながら、余暇を楽しむこともできるでしょう。そんな環境を提供することを考えて、空き家であったり、農地もセットにして、企業に売り込みに行かなければいけません。

起業者をサポートする起業支援（年間3件、500万円×3件）を町単独予算でやっているんです。お店を開業したり、いろんなことやっていただいたりする制度です。そういったまちづくりを、町中で働く場を確保していく必要がある。

僕は元々、企業誘致を考えていましたが、大阪で働いていたので、こちらに住んでいただくという方が現実的かもしれないと、今分析中です。

鈴木：その上でお尋ねするんですが、若い夫婦がここで暮らしていくときに、まづ仕事があるということが

大事です。住む家がある、そして、子どもを育てるサポートシステムが充実しているかどうかです。

町長：多くの声を聞いたのは、遊具のある公園が欲しいとか、そういったハード面の部分はよく聞きました。今ちようど西部公園の整備をしているんですけど、そこは遊具というよりは、小川をつくって自然と触れ合えるような、しかも建物の中では、雨が降っても寒いときでも快適に子育てママたちが集えて、子どもたちが遊べるようなスペースをつくっているんです。

元の計画では、パークゴルフ場の利用者のための食堂とか休憩所という発想だったようですけども、私は子育てをするお母さんたちが、一定の場所で快適に過ごせることが必要であると考えて、少し計画変更して整備しています。その場所は万葉の里の向かい側です。公園で遊んで帰りは道の駅へ寄ってもらったり、道の駅の前にある河川敷でキャンプしていただくのも結構

ですし、半日ないし一日過ごせるような場所を提供することによって、ニーズを満たしたいと思っています。ソフト面で言うと、今までインフルエンザの予防接種は、高齢者が1000円負担できて、中学生までの子どもだと1000円引きだったんですが、そんな差を付ける理由もないので、子どもも1000円でできるようにしたし、就学前の子ども園の子どもさんたちには、完全に給食費無償化にしました。そういうことも含めて、子育て世帯にとって、安心して育てられる環境づくりを進めていきたい。それをしっかりと発信していく。この町で最大に足りていなかったと思うのは、発信力ですね。いろんな機会をとらえて、町がやっていることを住民に対して発信していく。

あとは、かつらぎ町にある企業の情報を住民の目線に合わせて求人情報とも提供していかないといけないし、もう少し企業と行政と住民が近くなるような関係性をつくりたい。それによって若い世帯が、この町に住み続けたいくなるような政策につながっていくと思っています。これはブレずに信念を持ってやりたいと思っています。

鈴木：コミュニティの再構築ですね。インフルエンザ、子ども園の話はこの4月から実施したんですね。

町長：そうです。財源を確保するためにやめた事業もありました。管理職手当を見直したり、ありとあらゆるところ、できることからやり始めました。

鈴木：かつらぎ町は自然、歴史、産物と地域資源がたくさんあります。観光まちづくりについては、どういう政策をお考えですか。

町長：観光に関しては、今高野山が年間160万人近くで、かつらぎ町は134万人ぐらいの入り込み客数があるんです。決して観光面で劣っているわけではないです。ただもつともっと発展させるためには、今もやっているブドウ狩りなどの体験型の観光、着地型観

の体験型の観光、着地型観

の体験型の観光、着地型観



ブドウの里 御所地区

町を代表する観光地
天野 丹生都比売神社

光というのを少しやってい
ますが、もう少しその辺を
やっていきたい。例えば、
今、耕作放棄地なんかも若
干増えてきているんですが、
そこに、ふるさと納税でミ
カンの木や柿の木のオーナ
ーとなつてもらうことによ
つて外からいらつしやる方
つまり関係人口として増や
していく。関係人口という
のは観光客以上であつて住
民未満。定期的に来てくれ
て、来るときにはいろんな
消費していただくチャンス
も出てきますので、そうい

う人を増やしていきたいと
いうことで、ふるさと住民
票という制度を今年4月か
らスタートしたんです。ふ
るさと住民票を用意して、
ふるさと住民票を受け取っ
ていただいた方には、定期
的にイベントの案内をし
たり、観光案内したりとい
うことで、進めていこうと
しています。スタートはかつ
らぎ町のファンになつても
らうことです。

鈴木：フルーツフードツ
リズムはどうお考えでしょ
う。
町長：今、かつらぎ町と橋
本市が中心になつて、高野
山麓ツーリズムビューロー
というのをやっていまして、
橋本の方は高野山麓の精進
野菜ということをやり始め
ました。我々はフルーツと
いうことで、この2つのキ
ーワードをもつて売り込ん
でいきたいと思つているん
です。柿と桃とミカンの3
つは、和歌山県を代表する
フルーツですから、もう少し
連携も必要かなと思つて
います。JA紀の里とかと
連携できるような仕組みに

安全安心なまちへ 県内初の防災無線を整備

なりつつあるみたいですが
ら、今後は広域的にやつて
いく必要があるんじゃない
のかなとは思っています。

鈴木：ところで、町長はか
つらぎ町の防災対策の遅れ
をあげ、早急に解決しなく
てはいけない問題だと言っ
ていますね。

町長：はい。防災対策は、
全地域、全世帯に対して情
報提供できる仕組みを今、
構築しようとしています。

今年度中に多分、整備でき
ると思うんですが、全世帯
に防災ラジオみたいな端末
受信機を無償でお貸しして、
昔あったポケベルの周波数
を使って放送するんです。
あれは270キロヘルツの
パワーがあるので、割と遠
く、特に山間部に強いんで
す。

鈴木：そうなのですか。

町長：それを県下で多分初
めて採用するんじゃないで
すかね。従来の無線のアン
テナは、山間のところにい

かすには、数を建てなけれ
ばいけないかつたんですけど、
今回は、紀の川市の飯盛山
の上と、花園の久木という
高野山の近くの2か所に建
てるだけで、かつらぎ町全
域をカバーできるので、そ
れを使つて進めています。

これは、文字放送ですから
肉声ではないので、緊迫感
がないと言う方もおられる
のですが、聞き直しもでき
るし、聴覚障害の方には文
字で放送ができる機種もあ
りますので、すべての住民
の方に瞬時に適切にお伝え
できる仕組みができます。

行政無線の事業費は約6
億2千万円だったと思いま
す。

鈴木：世帯数は何世帯です
か。

町長：確か、7200余り。
この辺は津波がくる場所で
はないので、緊急的に防災
無線を使うということは余
りないのですが、ほとんど
の場合、大雨洪水、崖崩
れなどの災害になります。

大雨のときに外のスピーカ
ーではなかなか聞こえない
ので、家の中で聞こえるこ

とを前提に、だけど外でい
るときも聞こえないと困る
というケースもありますの
で、ある一定のエリアには
外のスピーカーも整備をし
ようとしています。

一人一人が主役のまちへ 自分事会議をスタート

鈴木：安全安心なまちづく
りですね。町長は最初に、
自分事といました。オー
ルかつらぎによる協創の場
づくりを意味するのではし
ょうか、様々な問題を自分事
と考えていくには、住民の
意識の改革、行政と住民の
信頼関係が大事になつてき
ます。

町長：そうですね、まず協
創というか、住民とともに
という意味合いで言います
と、行政がやる事業に対し
て、どのような興味関心を
持つていただくか、またそ
の事業に対してどのような
判定というか、評価をする
かということになってくる
と思うんです。今思つてい
るのは、自分事会議という
ことで、高校生から70歳、



ふるさとを発信
かつらぎ町のインタビューボード

80歳ぐらいまでの世代を無作為抽出して、この方々に事業仕分の判定人になっていただいて、役場は担当課長なりが説明をし、判定人の前で質問したりとかするコーディネートや仕分け人を置いて、その議論を聞いていただき、この事業は要るのか要らないのか、拡充した方がいいのか、見直した方がいいのか、いろいろ出てくると思うんですけど、そういったことを通じて、少しずつ住民に行政のしていることを理解してもらい、自分だったらどうするとか、自分事に考えていただくような機会を増やしていこうと、今、思っています。

各地域の自治会長さんとか自治区長さんとかが、それぞれの地区の要望書を持ってくるんですよね。その要望書を見ていると、なかなか優先順位を高くできない要望があるわけですよ。どれぐらいの要望が来ているのか、どんな内容なのか全部ランク分けして、今ちょうど説明に回り始めたところです。そうすると、こういう大変な地域もあるから、もっと考えて厳選していかなあかんよねという、そんな感じへシフトしてきています。

鈴木：行政が、住民の声、住民の期待にきっちりと考えていくことで、信頼関係は成り立つ話だと思っんですが、これまで住民懇談会のようなものはあったんですか。

町長：過去に何回かやりかけたけどやめてしまったというのの聞いたことがあります。

鈴木：住民懇談会みたいなものができれば、住民と行政が共に考えていくまちづくりができるのではないかといい期待も抱くんだけれども、しかしですね、今ごる何をしに来たんだと言われそうな感じもしないではないです。どうですかね。

町長：いや、そんな感じではないと思います。実は計画して日程まで調整したのに、結局、コロナで中止はしましたけど、僕は大事なものは、聞かれてすぐ答えられるものでないと駄目だと思っっているんです。住民に聞かれて、こういう困り事があると、どう解決したらいいのかとか、どうにかできへんのかと言われたときに、それについては、こういう解決の方法があるので、一度、担当者で打合せをさせてくださいということを直接、住民と幹部職員がやりとりしないと、担当者がいくらやっていても、それが上に伝わっているか住民は不安なんです。だから本来、一番責任ある立場の人たち、私も含めてかつらぎ町の参事会という会のメンバーが責任持ってお答えしますよと、お答えしたこと

に関して責任持ってやらせます、やりますみたいな信頼関係をつくっていかなくやいけないと思っっています。今更というよりは、やっとしてくれたかと思っってもらえるようにしたいなと思っっています。

鈴木：そこから住民と行政の対話が深まっていく。

町長：はい。

鈴木：かつらぎ町は変わりがうだなというふうに思っながら聞かせていただいています。

町長：当然ながら住民にとって良くなったよねって思ってもらえるような、体感できるようなところが必要ですね。

それ以外にも役場の職員さん、愛想が良くなったねとか、対応良くなったよねみたいなことも含めて、僕らは人づくりだと思っっているんです。いい人が育っつてないと、いい町には絶対ないですね。だから文句言うだけの話ではなくて、文句も言うけど力も貸すよという人たちを育てていきたい。最終的には、居場所と出番がある町、そういうまちづくりをしたいと思っっています。そのためには人が人を育てていくと考えたときに、まずは役場職員が育たないと駄目ですので、役場職員が育つたことを前提に町の全体が元気になっていくという考え方をもって、この4年間やりたいたいなと思っっています。

鈴木：住民一人一人に居場所がある。そして：

町長：出番がある。

鈴木：努力し、挑戦すればみんなに出番がある。そういうまちをめざしたいということですね。

町長：そうです。

鈴木：最後に、中阪町長が大事にしている言葉を聞かせてください。

町長：強いて言うくと、勇往邁進と言うんですかね、そういう茨の道をどんどん、臆せず進んでいく、そんな人生というか、生き方をしたいなと思っっています。

鈴木：スポーツマンの町長らしい、言葉と伺いました。今日は、どうもありがとうございました。